

OPINION オピニオン・スライス SLICE

元
尼崎市長
現
グンゼ株式会社社外取締役

白井
文
さん

AYA SHIRAI



座右の銘は「断らない」
女性市長、
社外取締役に挑戦

—— 尼崎市長に立候補されたきっかけは？

ANAの客室乗務員として11年間勤務後、起業して、人材育成の仕事をさせてもらっていました。ちょうど関西空港がオープンする前で、海外のお客様を迎えるために、従業員研修がすごく重要だということで、割と仕事が回っていました。

ある日、仕事から帰って、尼崎の自宅でテレビを見ていたら、尼崎のことがニュースになっていたんですね。レポーターが尼崎の市議会議員に「あなた本当に出張に行ったんですか？」と問うと、その議員が「ハチドに行きました」と言ってるんです。八戸（はちのへ）のことなんです。それを見て私は頭のどこかが切れたんです。それで、こんな人達に政治を任せといたらいかん、普通の市民が政治に口を出さないといけないと強く熱く燃えてしまったんです。それで、市議会議員に立候補することになったんです。

—— 立候補された時の御年齢は？

33歳です。私は結婚していたけど子どもがいなかったんです。その当時、セクハラ的な発言がすごく多くて、子育て支援や食育について質問をしたら、「子どももおれへんくせに子育て支援なんか質問するな」とか「レベル低いな。台所でやれ。ここは議会やぞ」とか、野次を飛ばされました。

—— セクハラ野次は、普通にあったんですね。

はい。でも当時は、誰も問題視できるような状況ではなかったです。

—— 8年間で議員を辞めて、すぐに市長に立候補されたんですか？

市議選が終わって1年半ぐらいたったときに市長選挙だったんです。それで、同期の議員さんたちから、今こそ市長になって市役所を立て直し、組織を改革する時が来たよ、と言われたんです。私は、当時、離婚調停中でもあったし断り続けていたんです。でも、当時、財政再建しないとイケないけれども、大変厳しい状況の中で火中の栗を拾う人がいないし、それに「市役所改革」、つまり市民のための市役所、市民目線の職員というような組織に変えたいという思いがふつふつと湧いてきて、立候補しました。

—— 市長になって、やろうと思っていたことはできましたか。

全てできたわけではないですが、車座集会等を通して、市民との対話が大切であるという意識とか、市民から見える状況の中で施策の優先順位を市民と一緒に構築していこうという風土みたいなものは一定つくれたかなと思います。

当時の車座集会というのは、役員をいっぱい連れて行って、事前に町会長さんとか民生委員さんとかに動員をかけて、みたいなことが多かったんですが、私は全くのフリーハンドで、誰が来てもいいですよという形で、スー

パーとか、老人施設で実施しました。いろいろなところで市民が誰でも自由に参加できて、私が1人で全部答えるパターンを、1年目からチャレンジしました。

—— しんどいんですね。

でも、すごく勉強になりました。財政再建のプランの説明会にはプランに反対する人の方が大勢来られるので、反対する人たちに対していかに接点を見出していか、といった訓練は出来たと思います。私自身、とても引き出しが増えましたし、市民の気持ちというのもすごく理解できるようになりました。それで、反対の立場の人たちにも、白井さんは本気なんやな、逃げないんだなということが伝わって、意見が違っても話は聞かないかとか、自分たちの立場からはちょっと受け入れられない部分もあるけれども、でも行政的にはいたし方ないのかなというような認識を徐々に持ってくださいるようになっていったんです。

最終的には、800億円お金が足りないという状況を少しでも改善するために、300以上の項目の見直し提案を市民が受け入れるということになりました。バスの有料化のことも、大阪みたいなモメ方にはならず、「子どもたちのためにツケは回されへん、学校に通う子どもたちはお金を払っているんだし、やっぱり自分たちも払わなあかんの違うか、私らからお金取って」と市民の皆さんから言われ、涙が出ました。

—— 女性市長だったことのプラス面とマイナス面があるとすれば何でしょうか。

議員時代は、無所属で女性議員ということで、非常にマイノリティーだったんです。議員同士の中で虫けらのように扱われていましたし、職員の私への対応も目に見えて誠実でなく、差別感がありました。マイノリティーというのを経験している私が市長をした意味というのはやっぱりあったと思います。反対派の皆様のところにも出て行って説明をしたり、意見交換をして、結果は一緒でも説明責任は果たしたい、プロセスは丁寧にしたかったのは、女性だからというよりはマイノリティーを味わっていたからだと思います。

—— 議員をされていたことで、市のことがよく分かっておられたんですか。

いや、議員の理解レベルと職員の理解レベルは全然違いました。議員というのは自分の興味のあることだけ勉強すればよかった感があったのですが、市長というのは広く全般にかかわらざるを得なくて、とにかく全部の議案、全部の事柄の最終判断、最終責任は私なので、少なくとも自分がちゃんと理解して納得しないと決裁をしたらいけないと思っていました。だから、職員を呼んで、「一から分かるまで説明して。私分からないということ

は市民が分からないということよ。私を説得して」という感じで、とにかく聞いて自分の頭で考えて答えを出すという日々でした。それでも納得がいかなかったら、専門家に聞きに行ったりもしました。

—— 市長のお仕事は結構大変なんですね。

こんなもんだと思って印鑑を押すことができたら楽な仕事なんです。職員というサポーターがいますし、「そつなく」はできます。でも、私が市長になろうと思ったのは、市役所を変えたい、市民のための市役所、市民が誇りに思える職員に変えたいという強い強い思いだったからです。一生懸命やると大変だけど、反対に一生懸命やるからこそ経験になるんだと思うんですよ。

—— 市長を辞めた後は？

ABCテレビから声をかけていただき、「NEWSゆう」、「キャスト」という番組でコメンテーターをさせてもらいました。

それから、ゲンゼの社外取締役役に就任しました。頼まれた時は、私には無理だし断ろうと思っていたんですが、当時の常務（現社長）から、社外取締役は専門知識は必要としていないし、広く一般的な感覚、生活者、地域住民の感覚でいろいろな意見を述べてほしいし、これまでの経験の中で感じることを言ってもらったらいいと言われました。当時の私の座右の銘が「断らない」だったので、お引き受けしました。

—— 社外取締役はどうか。取締役会で意見は聞いていただけますか。

多分、私は、業界の常識からは外れている質問やレベルの低い質問をしていると思うんですけど、皆さんは、業界以外の人はそういう見方をするのかというふうに受けとめて、とても真面目に答えてくださいます。

—— 弁護士会も女性弁護士を社外役員にということで名簿づくりをしています。

是非弁護士の皆様にも活躍してもらいたいと思います。ただ、法律の知識だけではなくて、組織とかチームとか目標管理とか、組織の課題というのは幅広いです。そういう部分を意識していろいろ興味を持たれて学んだり経験を積まれたら、弁護士さんは普通の人にはない専門知識を持っていらっしゃるのととても心強いし、いい社外取締役になれると思います。

—— 弁護士、弁護士会に一言お願いします。

今、ドーンセンターの理事をしているんですが、弁護士さんにはジェンダーの視点で、困難を抱えている女性のサポートとその周辺のことを理解していただければと思います。

(interviewer : 太平信恵 / Photo : 武田真実)